

# たずねびと

太宰治

青空文庫



この「東北文学」という雑誌の貴重な紙面の端をわずか拝借して申し上げます。どうして特にこの「東北文学」という雑誌の紙面をお借りするかというと、それには次のような理由があるので  
す。

この「東北文学」という雑誌は、ご承知の如く、<sup>ごと</sup>仙台の河北新報社から発行せられて、それは勿<sup>もちろん</sup>論、関東関西四国九州の店頭にも姿をあらわしているに違いありませんが、しかし、この雑誌のおもな読者はやはり東北地方、しかも仙台附近に最も多いのではないかと推量されます。

私はそれを頼みの綱として、この「東北文学」という文学雑誌

の片隅<sup>かたすみ</sup>を借り、申し上げたい事があるのです。

実は、お逢<sup>あ</sup>いしたいひとがあるのです。お名前も、御住所もわからないのですが、たしかに仙台市か、その附近のおかたでは無かろうかと思っています。女のひとです。

仙台市から発行せられている「東北文学」という雑誌の片隅に、私がこのまじしい手記を載せてもらおうと思ひ立つたのも、そのひとが仙台市か或<sup>ある</sup>いはその近くの土地に住んでいるように思われ、ひよつとしたら、私のこの手記がそのひとの眼にふれる事がありはせぬか、またはそのひとの眼にふれずとも、そのひとの知合いのお方が読んで、そのひとに告げるとか、そのような方に一つの僥<sup>ぎようこう</sup>倖<sup>しう</sup>が、……いやいや、それは無理だ、そんな事は有り

つこ無いよ、いやいや、その無理は充分にわかっています、しかし、私としてはそんな有りつこ無い事をも、あてにして書かずに居られない気持なのです。

「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食こじきは私です。」

その言葉が、あの女のひとの耳にまでとどかざる事、あたかも、一勇士を葬とむらわんとて飛行機に乗り、その勇士の眠れる戦場の上空より一束の花を投じて、決してその勇士の骨の埋められたる個所には落下せず、あらぬかなたの森に住む鷲わしの巣にばさと落ちて雛ひなをいたずらに驚愕きょうがくせしめ、或いはむなしく海波の間に浮び漂うが如き結末になると等しく、これは畢ひつき竟よう、とどくも届

かざるも問題でなく、その言葉もしくは花束を投じた当人の気がすめば、それでよろしいという甚だはなは身勝手なたくらみにすぎないようにも思われますが、それでもやはり私は言いたいのです。

「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」と。

昭和二十年、七月の末に、私たち家族四人は上野から汽車に乗りました。私たちは東京で罹災りさいしてそれから甲府へ避難して、その甲府でまた丸焼けになって、それでも戦争はまだまだ続くというし、どうせ死ぬのならば、故郷で死んだほうがめんどうが無くてよいと思い、私は妻と五歳の女の子と二歳の男の子を連れて甲府を出発し、その日のうちに上野から青森に向う急行列車に乗り

込むつもりであつたのですが、空襲警報なんかが出て、上野駅に  
充満していた数千の旅客たちが殺気立ち、幼い子供を連れている  
私たちは、はねとばされ蹴けたおされるような、ひどいめに逢あひ、  
とてもその急行列車には乗り込めず、とうとうその日は、上野駅  
の改札口の傍で、ごろ寝という事になりました。その夜は、凄すごい  
月夜でした。夜ふけてから私はひとりで外へ出て見ました。この  
あたりも、まず、あらかた焼かれていました。私は上野公園の石  
段を登り、南洲の銅像のところから浅草のほうを眺めました。湖  
水の底の水草のむらがりを見る思いでした。これが東京の見おさ  
めだ、十五年前に本郷の学校へはいつて以来、ずっと私を育てて  
くれた東京というまちの見おさめなのだ、と思つたら、さすがに

平静な気持では居られませんでした。翌朝とにかく上野駅から一番早く出る汽車、それはどこへ行く汽車だつてかまわない、北のほうへ五里でも六里でも行く汽車があつたら、それに乗ろうという事になつて、上野駅発一番列車、夜明けの五時十分発の白河しらかわ行きに乗り込みました。白河には、すぐ着きました。私たちはそこで降されて、こんどはまた白河から五里でも六里でも北へ行く汽車をつかまえて、それに乗り込む事にしました。午後一時半に、小牛田こごた行きの汽車が白河駅にはいりましたので、親子四人、その列車の窓から這はい込みました。前の汽車と違って、こんどの汽車は、ものすごく混雑していました。それにひどい暑さで、妻のほだけた胸に抱き込まれている二歳の男の子は、ひいひい泣き通し

でした。この下の子は、母体の栄養不良のために生れた時から弱く小さく、また母乳不足のためにその後の発育も思わしくなくて、ただもう生きて動いているだけという感じで、また上の五歳の女の子は、からだは割合丈夫でしたが、甲府で罹災する少し前から結膜炎を患い、わずら空襲当時はまったく眼が見えなくなつて、私はそれを背負つてほのお焰の雨の下を逃げまわり、焼け残つた病院を捜して手当を受け、三週間ほど甲府でまごまごして、やつとこの子の眼があいたので、私たちもこの子連れて甲府を出発する事が出来たというわけなのでした。それでも、やはり夕方になると、この子の眼がふさがつてしまつて、そうして朝になつても眼がひらかず、私は医者からもらつて来たほうさんすい硼酸水でその眼を洗つてやつて、

それから眼薬をさして、それからしばらく経たなければ眼があかないという有様でした。その朝、上野駅で汽車に乗る時にも、この子の眼がなかなか開かなかつたので、私が指で無理にあけたら、血がたらたら出ました。

つまり私たちの一行は、汚いシャツに色のさめた紺こんの木綿もめんのズボン、それにゲートルをだらしなく巻きつけ、地下足袋じかたび、蓬髪ほうはつ無帽という姿の父親と、それから、髪は乱れて顔のあちこちに煤すすがついて、粗末極まるモンペをはいて胸をはだけている母親と、それから眼病の女の子と、それから痩せこけて泣き叫ぶ男の子という、まさしく乞食の家族に違いなかつたわけです。

下の男の子が、いつまでも、ひいひい泣きつづけ、その口に妻

が乳房を押しつけても、ちつとも乳が出ないのを知っているので顔をそむけ、のけぞっていよいよ烈はげしく泣きわめきます。近くに立っていたやはり子持ちの女のひとが見かねたらしく、

「お乳が出ないのでですか？」

と妻に話掛けて来ました。

「ちよつと、あたしに抱かせて下さい。あたしはまた、乳がありあまつて。」

妻は泣き叫ぶ子を、そのおかみさんに手渡しました。そのおかみさんの乳房からは乳がよく出ると見えて、子供はすぐに泣きやみました。

「まあ、おとなしいお子さんですね。吸いかたがお上品で。」

「いいえ、弱いのですよ。」

と妻が言いますと、そのおかみさんも、淋さびしそうな顔をして、少し笑い、

「うちの子供などは、そりやもう吸い方が乱暴で、ぐいぐいと、痛いようなんですけれども、この坊ちゃんは、まあ、遠慮しているのかしら。」

弱い子は、母親でないひとの乳房をふくんで眠りました。

汽車が郡こおりやま山にお駅に着きました。駅は、たつたいま爆撃せられ

たらしく、火薬の匂においみたいなものさえ感ぜられたくらいで、倒壊した駅の建物から黄色い砂ほこりが濛もうもう々と舞い立っていました。

ちようど、東北地方がさかんに空襲を受けていた頃で、仙台は既に大半焼かれ、また私たちが上野駅のコンクリートの上にごろ寝をしていた夜には、青森市に対して焼夷弾しょういだん攻撃が行われたよ  
うで、汽車が北方に進行するにつれて、そこもやられた、ここも  
やられたという噂うわさが耳にはいり、殊ことに青森地方は、ひどい被害の  
ようで、青森県の交通全部がとまっているなどという誇大なこと  
を真面目まじめにくさつて言うひともあり、いつになったら津軽の果の故  
郷へたどり着く事が出来るやら、まったく暗澹あんたんたる気持でした。  
福島を過ぎた頃から、客車は少しすいて来て、私たちも、やつ  
と座席に腰かけられるようになりました。ほっと一息ついたら、  
こんどは、食料の不安が持ちあがりました。おにぎりは三日分く

らい用意して来たのですが、ひどい暑気のために、ごはん粒が納なつとう豆のように糸をひいて、口に入れて噛かんでもにちやにちやして、とても嘔のみ込む事が出来ない有様になって来ました。下の男の子には、粉ミルクをといてやっていたのですが、ミルクをとくにはお湯でないと具合がわるいので、それはどこか駅に途中下車した時、駅長にでもわけを話してお湯をもらって乳をこしらえるという事にして、汽車の中では、やわらかい蒸しパンを少しずつ与えるようにしていたのです。ところがその蒸しパンも、その外皮が既にぬらぬらして来て、みんな捨てなければならなくなっていました。あと、食べるものといつては、炒いった豆があるだけでした。少し持っているお米は、これはいずれどこかで途中下車になった

時、宿屋でごはんとかえてもらうのに役立つかも知れませんが、さしあたって、きょうこれからの食べるものに窮してしまいました。

父と母は、炒り豆をかじり水を飲んでも、一日や二日は我慢できるでしょうが、五つの娘と二つの息子は、めもあてられぬ有様になるにきまっています。下の男の子は先刻のもらい乳のおかげで、うとうと眠っています。上の女の子は、もはや炒り豆にもあきて、よそのひとがお弁当を食べているさまをじつと睨にらんだりして、そろそろ浅間あさましくなりかけているのです。

ああ、人間は、ものを食べなければ生きて居られないとは、何という不体裁な事でしょう。「おい、戦争がもつと苛烈かれつになつて

来て、にぎりめし一つを奪い合いしなれば生きてゆけないようになつたら、おれはもう、生きるのをやめるよ。にぎりめし争奪戦参加の権利は放棄するつもりだからね。気の毒だが、お前もその時には子供と一緒に死ぬる覚悟をきめるんだね。それがもう、いまでは、おれの唯一の、せめてものプライドなんだから。」とかねて妻に向つて宣言していたのですが、「その時」がいま来たように思われました。

窓外の風景をただぼんやり眺めているだけで、私には別になん  
のいい智慧ちえも思い浮びません。或る小さい駅ももから、桃とトマトの  
一ぱいはいつている籠かごをさげて乗り込んで来たおかみさんがあり  
ました。

たちまち、そのおかみさんは乗客たちに包围され、何かひそひそ囁ささやかれています。「だめだよ。」とおかみさんは強氣のひとらしく、甲高い声で拒否し、「売り物じゃないんだ。とおしてくれよ、歩かれないじゃないか！」人波をかきわけて、まっすぐに私のところへ来て私のとなりに坐り込みました。この時の、私の氣持は、妙なものでした。私は自分を、女の心理に非常に通つうぎよ暁うしている一種の色魔なのではないかしらと錯覚し、いやらしい思いをしました。ボロ服の乞食姿で、子供を二人も連れている色魔もないものですが、しかし、幽かすかに私には心理の駈かけひ引きがあったのです。他の乗客が、その果物籠をめぐって集り大騒ぎをしているあいだも、私はそれには全く興味がなさそうに、窓の外の

景色をぼんやり眺めていたのです。内心は、私こそ誰よりも最も、その籠の内容物に関心を持っていたに違いないのですが、けれども私は、我慢してその方向には一瞥いちべつもくれなかつたのでした。それが成功したのかも知れない、と思うと、なんだか自分が、案外に女たらしの才能のある男のような感じがして、うしろぐらい気が致しました。

「どこまで？」

おかみさんは、せかせかした口調で、前の席に坐っている妻に話掛けます。

「青森のもつと向うです。」

と妻はぶあいそに答えます。

「それは、たいへんだね。やっぱり罹災りさいしたのですか。」

「はあ。」

妻は、いったいに、無口な女です。

「どこで？」

「甲府で。」

「子供を連れているんでは、やつかいだ。あがりませんか？」

桃とトマトを十ばかり、すばやく妻の膝ひざの上に乗せてやって、

「隠して下さい。他の野郎たちが、うるさいから。」

果して、大型の紙幣を片手に握ってそれとなく見せびらかし、

「いくつでもいいよ、売ってくれ」と小声で言っただる男があら

われましました。

「うるさいよ。」

おかみさんは顔をしかめ、

「売り物じゃないんだよ。」

と叫んで追い払います。

それから、妻は、まずい事を仕出かしました。突然お金を、そのおかみさんに握らせようとしたのです。たちまち、

ま！

いや！

いいえ！

さ！

どう！

などと、殆んど言葉にも何もなっていない小さい叫びが二人の口から交互に火花の如くぱつぱつと飛び出て、そのあいだ、眼にもとまらぬ早さでお金がそつちへ行つたりこつちへ来たりしていました。

じんどう！

たしかに、おかみさんの口から、そんな言葉も飛び出しました。「そりや、失礼だよ。」

と私は低い声で言つて妻をたしなめました。

こうして書くと長たらしくなりますが、妻がお金を出して、それから火花がぱつぱつと散つて、それから私が仲裁にはいつて、妻がしぶしぶまた金をひっこめるまで五秒とかからなかつたでし

よう。実に電光の如く、一瞬のあいだの出来事でした。

私の観察に依れば、そのおかみさんが「売り物でない」と言つてはいるけれども、しかし、それは汽車の中では売りたくないというだけの事で、やはり商売人に違ひないのです。自分の家に持ち運んで、それを誰か特定の人にゆずるのかどうか、そこまではわかりませんが、とにかく「売り物」には違ひないようでした。しかし、既に人道という言葉が発せられている以上、私たちはそのおかみさんを商売人として扱うわけにはゆかなくなりました。

人道。

もちろん、おかみさんのその心意気を、ありがたく、うれしく

思わぬわけではないのですが、しかしまた、胸底に於おいていささか閉口の気もありました。

人道。

私は、お礼の言葉に窮しました。思案のあげく、私のいま持っているもので一ばん大事なものを、このおかみさんに差上げる事にしました。私にはまだ煙草が二十本ほどありました。そのうちの十本を、私はおかみさんに差し出しました。

おかみさんは、お金の時ほど強く拒絶しませんでした。私は、やつと、ほつとしました。そのおかみさんは仙台の少し手前の小さい駅で下車しましたが、おかみさんがいなくなつてから、私は妻に向つて苦笑し、

「人道には、おどろいたな。」

と恩人をひやかすような事を低く言いました。乞食の負け惜しみというのでしょうか、虚栄というのでしょうか。アメリカの烏賊かの缶詰の味を、ひそひそ批評しているのと相似たる心理でした。まことに、どうも、度し難いものです。

私たちの計画は、とにかくこの汽車で終点の小牛田こごたまで行き、東北本線では青森市のずっと手前で下車を命ぜられるという噂うわさも聞いていますし、また本線の混雑はよほどのものだろうと思われ、とても親子四人がその中へ割り込める自信は無かつたし、方向をかえて、小牛田から日本海のほうに抜け、つまり小牛田から陸羽線に乗りかえて山形県の新庄に出て、それから奥羽線に乗りかえ

て北上し、秋田を過ぎひがしのしろ東能代駅で下車し、そこから五能線に乗りかえ、謂いわば、青森県の裏口からはいって行ってごしよがわら五所川原駅で降りて、それからいよいよ津軽鉄道に乗りかえて生れ故郷の金木という町にたどり着くという段取りであつたのですが、思えば前途雲煙のかなたにあり、うまくいっても三昼夜はたつぷりかかる旅程なのです。トマトと桃の恵投にあずかり、これで上の子のきよう一日の食料が出来たとはいうものの、下の子がいまに眼をさまして、乳を求めて泣き叫びはじめたら、どうしたらいいでしょうか。小牛田までは、まだ四時間以上もあるでしょう。また、小牛田に着いても、それは夜の十時ちかくの筈はずですから、ミルクを作ったり、おかゆを煮てもらったりする便宜が得られないに違い

ない。

仙台が焼けてさえいなかったら、仙台には二、三の知人もいるし、途中下車して、何とか頼んで見る事も出来るでしょうが、ご存じの如く、仙台市は既に大半焼けてしまっているようでしたから、それもかなわず、ええ、もう、この下の子は、餓死がしにきまつた。自分も三十七まで生きて来たばかりに、いろいろの苦勞をなめるわい、思えば、つまらねえ三十七年間であつた、などとそれこそ思いが愚かしく千々ちぢに乱れ、上の女の子に桃の皮をむいてやったりしているうちに、そろそろ下の男の子が眼をさまし、むずかり出しました。

「何も、もう無いんだろう。」

「ええ。」

「蒸しパンでもあるといいんだがなあ。」

その私の絶望の声に応ずるが如く、

「蒸しパンなら、あの、わたくし、……」

という不思議な囁きささやが天そらから聞えました。

誇張ではありません。たしかに、私の頭の上から聞えたのです。

ふり仰ぐと、それまで私のうしろに立っていたらしい若い女のひ

とが、いましも腕を伸ばして網あみだな棚の上の白いズツクの鞆かぼんをおろ

そうとしているところでした。たくさんの蒸しパンが包まれてい

るらしい清潔なハトロン紙の包みが、私の膝ひざの上に載せられまし

た。私は黙っていました。

「あの、お昼につくつたのですから、大丈夫だと思いますけど。それから、……これは、お赤飯です。それから、……これは、卵です。」

つぎつぎと、ハトロン紙の包が私の膝の上に積み重ねられました。私は何も言えず、ただぼんやり、窓の外を眺めていました。夕焼けに映えて森が真赤に燃えていました。汽車がとまって、そこは仙台駅でした。

「失礼します。お嬢ちゃん、さようなら。」

女のひとは、そう言つて私のところの窓からさっさと降りてゆきました。

私も妻も、一言も何もお礼を言うひまが、なかったのです。

そのひとに、その女のひとに、私は逢いたいのです。としの頃は、はたち前後。その時の服装は、白い半袖はんそでのシャツに、久留くろめ米がすり紺のモンペをつけていました。

逢って、私は言いたいのです。一種のにくしみを含めて言いたいのです。

「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」と。



# 青空文庫情報

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：石川友子

2000年4月19日公開

2005年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# たずねびと

太宰治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>